

ヒッタイト歴史地理考 (I)

岸 本 通 夫

は じ め に

ヒッタイトの文献には、諸王の年紀その他に無数と云ってよい程の地名が出て来るが、これらのうちで、確かにその名を今の地図にここと指し示すことができるのは、Syria 方面の地名を除けば、わずかに Hattus¹⁾=Boğazköy と Kanesh=Kültepe との二つくらいのものである。考古学上の発掘調査が進んで、今日では以上のほか、Alışar Hüyük, Alaca Hüyük, Beycesultan などで、重要な結果がえられているので、これらの土地が、粘土板文書に見える多くの地名のいずれかに相当することは間違いがあるまいが、余りにも多い古地名のいずれがこれらの遺跡を指しているかについては、なお決定的な証拠が得られず、多くの学者を首肯せしめる定説さえまだない状況である。一方、小アジア方面の大規模な発掘が着手せられる以前から——すでにヒッタイト学の草創の頃からも、もっぱら文献自身によって語られている内的な証拠を手がかりとして、これら粘土板文書の古地名がどこを指しているかに関しては、少なからぬ研究が積み重ねられて来たことはいうまでもなく、この間若干の地名、特に地方名については、大部分の学者の見る所がおよその一致を示すに至ったものも少なくはないが、細部に至ってはヒッタイトの歴史地理は、なお五里霧中と云うも過言でないほどの晦迷を示している。

さて、ヒッタイトの歴史地理に関し、その全般にわたり、かなりの詳細に立ち入って考察を加えた二通りの研究を、筆者は最近手にすることができた、すなわち：

J. Garstang and O. R. Gurney, *The Geography of the Hittite Empire*. London, 1959.

F. Cornelius, *Zur hethitischen Geographie: die Nachbarn des Hethiterreiches*. (RHA 62, pp. 1-17) 1958.

ders., *Der Text des Hattusilis III, geographisch erläutert*. (RHA 65, pp. 104-116) 1959.

ヒッタイト歴史地理考 (I)

両者共に、旧来の諸説にあまり捉われず、夫々に独自の立場に立って、ヒッタイト時代の小アジアの地理を、全体として矛盾のない一つの像にまとめ上げようとした労作で、今後ヒッタイトの歴史地理にいくらかでも触れようとするもの必らず参照せねばならない研究であろうが、若干の点で二つの見方の間に著じるしい一致の見出だされる反面なお甚だしい見解の相違も少なからず、ヒッタイトの歴史地理を明らかにすることが、いかに容易ならぬ課題であるかを物語っている。概して云うならば、前者 Garstang と Gurney の共著 (以下 GGG と略) は、二人の著者が小アジア現地の地理に詳しく明るいことに強味があり、これに対して Cornelius の研究は、著者自からも述べているように²⁾、能うかぎり古典古代の地名のうちにヒッタイト期の地名の残存を探し求めようとする方法を取っている所に、特色が認められる。

古典期小アジアの歴史地理に関しては、Strabo 地理誌一卷の備えしかなく、小アジアの実際の地理に関しては、わずかに市販の4百万分の1の地図を通して輪廓をうかがうほかに手段がなく、加うるにヒッタイト学そのものの文献もまた極めて乏しい筆者に、以上の二つの研究を適切に批評することなどは、およそ限度を越えた課題であるが、能うかぎり忠実にこれらの論文を夫々に理解して見ることをまず試み、しかるのち両者の見解の異同を比較検討し、さらになしうれば、筆者としてもっとも妥当と思われる仮説を打出して見たい。

I. Arzawa 諸国について

Arzawa 国の名が最初に知られたのは、いわゆる Tell el Amarna 文書のうちに見出だされた Amenhetep III と Arzawa 王 Tarhundaradu との往復書簡によるのであるから、名そのものの知られた点では Hattus=Boğazköy の発掘よりも歴史が古い。ともあれ今日では、Hattus が小アジアの東半に根拠を有したに対して、Arzawa はその西半によった所の強国で、Suppiluliumas 大王 (ca. 1380~1340)³⁾ の子 Mursilis II (ca. 1339~1306) の征討によって完全に Hattus の領邦とせられるまでは、Syria 方面への進出に野心を燃やす Hattus の諸王に対して、絶えずその背面の脅威をなした所の一敵国であったこと、およびこの地方の住民は Luwi 族と称せられて、Hittite 語とは近い関係に立つがしかも判然と相異なる一方言 Luwi 語を用いたことの二点については、かなり早くから異論がなかった。しかしながら、Arzawa 国が小アジア西部または西南部の地中海に面した地方を占めたについては、多くの人の見る所が一致しているにしても、さらに的確にこの国の中心部すなわち Arzawa 本土⁴⁾ を地図上に指す段に

なると、ほとんど人毎にその指す所が相異なることは、例えば、Goetze, Kleinasien (1957) の巻末の地図, Cavaignac, Les Hittites (1950) の巻頭 (pp. 8-9) の地図, Gurney, The Hittites (1954) の巻頭 (p. xvi) の地図を対照して見るだけで、明らかになる。Goetze の Arzawa は Pamphylia を, Cavaignac の A. は Cilicia の中部辺りを, Gurney の A. は実に Lydia から Caria にまたがる地方を指しているのである。

さて A. 国の歴史地理を考証するための史料は、Mursilis II の十年年代記と大年代記⁵⁾, Mursilis 以後のヒッタイトの諸王が A. 諸国の小王たちと交した条約の文書,⁶⁾ Hattusilis III (ca. 1275~1350)⁷⁾ の諸記録がその主要なもの⁷⁾であるが、これらに基づく GGG の見方にまず耳を傾むけて見ることにしよう。

まず、幾度となくヒッタイトの国へ侵入したことが記録され、また Murs. II がこれを完全に攻め亡ぼして、三四の小国に解体してしまうには二年を要した所のこの A. 国が、たとえ遂には亡び去ったにしても、もとは Hattus の国に対抗して小アジアの覇を争うほどの強国であったことを、著者 Garstang & Gurney と共に、そしてまた多くの学者と共に、認めるならば、Pamphylia 乃至 Cilicia 中西部の礪角不毛の山地よりも、のちに Croisos 王の富を謳われた Lydia の沃野こそ強国 Arzawa の根拠たるにふさわしいという GGG の見方 (p. 84) は、全面的な賛同を促がすに足るものを含んでいるように思われる。加うるに、(cl.) Calycadnos=(tk.) Göksu⁸⁾ の河口に近い Silifke より Pamphylia を含めて Miletos に至るまでの小アジアの南西岸一帯には、鉄器時代の以前にさか上る集落の趾が全く見出だされないという考古学上の事実⁹⁾ は、一層上の見方を補強するかのごとくである。

さて次に、両氏は A. 本土すなわち Lydia という見方に基づいて、A. 国の首都 Apasas を後の Ephesos に比定しようとする。Apasas が海辺にあることは、Murs. II の攻撃に耐えかねた A. 国の最後の王 Uhhazitis が、この都より海上に逃れたという記述¹⁰⁾ があるので疑問の余地がなく、Lydia 方面の海港として Ephesos と Smyrna とが挙げられるうち、Apasas の名との近似と、王都としての気候上の条件、考古学上の若干の事実を考え合せて、Apasas = Ephesos とおこうとする GGG の見方 (p. 88) は、Ephesos において何か決定的な考古学上の証拠がえられることを期待しつつ、今は仮にこの見方に従っておいてよいように思われる。

ひるがえって、Cornelius の説く所に聞いてみよう。Cornelius はむしろ、Apasas

と Ephesos との名の近似に加えて、古典時代に Artemis 信仰の一大中心であった Ephesos は、余程古くからの都であったに違いないことが推定せられるという見地から、Apasas=Ephesos の比定を試ろみ、逆にこの比定から出発して、Arzawa 本国を、Ephesos を中心とする沿岸地方に求めて、ほぼ G., G. 両氏と同様の結論に達している¹¹⁾。

我々も今は一先ず、狭義の Arzawa はおよそ古典期の Lydia に当り、その首都 Apasa は後の Ephesos に当ることを第一の仮説として認めることにし、A. 諸国方面の地理を矛盾のない一つの像に描き出すことを試ろみて見よう。

本論文において、我々が G., G. 両氏の説く所に同調してもよい第二の基本的な仮説は、Wilusa=Ilion, Taruisa=Troia の比定であり、またこれと密接な関連をもち、むしろこの見方の前提をなすと云ってもよい所の、Ahhiyawa は 'Αχαιῶν の国に当るとの主張である。周知のように、ヒッタイトの文書に見える Ahhiyawa の名を Achaia, Achaioi に結び付けることを提唱したのは、Forrer であった¹²⁾が、Ventriss による Mycenai 文書の解読の成功以来、ヒッタイト史の終りに近付くほどその名の文書に出ることが繁くなる Ahhiyawa 国に Achaia 人の国を見ようとする考えは、次第に賛同者を加えつつあるものようであり¹³⁾、特に Gurney はこの見解のもっとも強力な支持者の一人である¹⁴⁾。Ahhiyawa と Achaioi の音の対応には、なお釈然としかねるものがあり、Wilusa と Ilion, Taruisa と Troia の音の対応にも、Kretschmer や Forrer 以来の諸家の論証の努力¹⁵⁾にもかかわらず、なお素直にうなずきかねるものが残るが、今は仮に G., G. 両氏の観点に従いがい、これらの比定を基本的な仮説の一つとして認めて、A. 諸国の地理の再構成を試ろみることにしよう。

因みにこの点に関しての Cornelius の見解は、必ずしも G., G. 両氏の見方とは一致しない。すなわち、C. 氏は、Wilusa が Ilion を含む可成りの地域を指すと見る点では、両氏との一致を示すが、Ahhiyawa の国を Pamphylia の地に求めているのである¹⁶⁾。もっとも、Ahhiyawa が Achaia 人の国を指したものであることは認めていない訳ではないようで¹⁷⁾、察するに Ahhiyawa 国=Pamphylia の比定にも、Ahhiyawa=Achaioi の認定がいくらか前提として働いていないではないらしいと思われる。というのは、Pamphylia の地名は、改ためて解説するまでもなく、pam-phylē < *pam-phylē の国を意味し、丁度中世の Alle-mannia が、ゲルマンの あらゆる (alla-) 部族の 人々 (-mann) の混成よりなる国を意味したように、Pam-phylia は、ヘラスの あら

ゆる (pam-<pant-) 部族 (phyle) の混成せるものをつくった植民地を意味し、ヘラス族の植民の事実が、この地名の背後にあったことは、その他の伝承によっても明らかで、Ahhiyawa の国名に Achaia 人の名の投影を認めればこそ、ヘラス族の植民地 Pamphylia に Ahhiyawa を比定した事情もあろうかと考えられる¹⁸⁾。しかしながら、上述したように、Pamphylia の沿岸に鉄器時代以前の集落跡がない事実は、ヘラス族による Pamphylia の植民がもっと後の時代に属していることを教えているようである。

最後に一言申し添えておかなければ、G, G. 両氏は、Ahhiyawa 国を海上すなわちエーゲ海上の国と見、ヒッタイトの文書に散見する Ahhiyawa の王とは、Mycenai に王宮を構えて、全 Achaia 人を統帥した王者その者と見ている¹⁹⁾。

第三の基本的な仮説として、Lukka, Luqqa=Lycia の比定を認めることにしよう。この比定は、G, G. 両氏および C. 氏のみならず、古くから多くの学者の唱えまたは承認した所であった²⁰⁾。これは、単に Lukka と Lycia との音がよく似ているばかりではなく、Lukka に関連して文献に現われるこの方面の都市名もまた、例えば、Wallarimma=Hyllarima, Dalawa=Tlōs, Hinduwa=Candyba, Arinna=(lyc.) Arīna [= (cl). Xanthos] などのように、古典時代の地名に相当するらしく見えるものが少なくない²¹⁾ ことによる。

さて、大なり小なり G., G. 両氏や C. 氏の見解とほぼ一致した見方を取りうる、または取っても差支えないとする以上の三つの仮説を前提として、A. 諸国の地理を考証して見ようとするのであるが、今一度ここに三つの前提を要約しておこう：

- 1) Arzawa=Lydia, Apasa=Ephesos.
- 2) Ahhiyawa=Achaiói の国, Wilusa=Ilion 地方, Taruisa=Troia 地方.
- 3) Lukka=Lycia, Dalawa=Tlōs, Hinduwa=Candyba, Arinna=Arīna (= Xanthos), Wallarimma=Hyllarima, etc.

所で、Arzawa 方面の地理を考証するための手掛りを提供する諸種の史料のうち、まず第一に取上げらるべきは、Mursilis II の年代記の第三、第四年に関する部分、すなわち A. 国征討のことを叙した条りであろう。以下まず、原文を引用し、これの邦訳を記すことから、我々の作業を始めよう。王の十年年代記 (KBo III 4) の第 II 欄第 8~32 行によれば：

ヒッタイト歴史地理考 (I)

nuza ERÍNMEŠ ANŠU. KUR. RAMEŠ nininkun, namma apedani witti I. NA KUR arzawa iyanniyannunpit. A. NA Iuhḫazitima LÚTE. MA uianun, nušši ḫatranun, ĪRMEŠ-YA-wattakan kwieš anda uer, nuwarašta appa kwit wewakkinun, nuwarašmu appa natta paišta, nuwamuza TUR-lan ḫalzeššešta, nuwamuza tepnuškit, kinunawa eḫu, nuwa zaḫḫiyawaštati, nuwannaš DU BE. LÍ. YA DI. NAM ḫannau.

訳 そして軍を起し、かくしてこの年 A. 国へ余は進軍した。さて (A. 国王) Uhhazitis に使節を派し、書き送って曰く、「我が奴隷の汝の許へ (逃れ) 入りし者、これが返還を余は汝に求めたるに、汝はこれを余に返還せず、余を若少呼ばわりし、余を蔑したり、今こそいざ戦を交えん、我が主なる嵐の神の裁きを下し給わんことを」と。

maḫḫanma iyaḫḫat, nu maḫḫan I. NA ḫUR. SAGIawaša arḫun, nuza DU NIR. GÁL EN-YA para handandatar tekkuššanut, nu GIŠkalmišanan šiyait, nu GIŠkalmišanan ammel KARAŠḫA-YA uškit, KUR URUarzawayan uškit. nu GIŠkalmišanaš pait, nu KUR URUarzawa walḫta, ŠA Iuhḫazitiya URUapašan ḫappiran walḫta, Iuhḫazitina ginuššuš ašešta, naš irmaliyattat. nu maḫḫan Iuhḫazitiš irmaliyattat, našmu namma zaḫḫiya menaḫḫanda natta uit, numukan Ipiyamainnaran DUMU-ŠU QA. DU ERÍNMEŠ ANŠU. KUR. RAMEŠ menaḫḫanda para naešta. našmu I. NA IDaštarpa I. NA URUwalma zaḫḫiya tiyat, nan DŠAMŠI zaḫḫiyannun. numu DUTU URUarinna..... piran ḫueir, nuza Ipiyamainnaran DUMU Iuhḫaziti QA. DU ERÍNMEŠ-ŠU ANŠU. KUR. RAMEŠ-SU tarḫun, nankan kuenun, namman appanpit eppun. nukan I. NA KUR URUarzawa parranda paun, nu I. NA URUapaša A. NA ĀLIM ŠA Iuhḫaziti andan paun. numu Iuhḫazitiš natta mazzašta, našmukan ḫuwaiš, naškan aruni parranda guršawananza²²) pait, naškan apiya anda ešta.

訳 進んで、Lawasa 山に到ったとき、我が主なる千早ぶる嵐の神は神威を示し給い、雷電を投げ給い、このい^いか^かづ^づち^ちは我が陣営からも A. 国からも見えた。い^いか^かづ^づち^ちは下って、A. 国を打ち、Uhhazitis の Apasa の都を打ち、Uhh. 王を足腰立たぬようにして、王は病みついてしまった。かくて Uhh. 王は患ろうて、これがため余に向って戦かい来ることなく、その子Piyamainnaras をして軍を率いて余に向かわしめた。王子 Piy. は Astarpa 川の Walma において戦を挑み、朕はこれと戦こうた。Arinna の日の神を始め八百万の神々の加護により、余は Uhh. 王の子 Piy. とその軍勢に打ち勝ち、これを打ち破り、さらにこれを追撃した。A. 国内へ侵入し、Uhh. 王の Apasa の都へ入城した。Uhh. 王は我 (か攻撃) に耐えかねて、余より逃れ、海を越えて走り、そこに (=海上の島に) 居った。

以上により、Mursilis II のヒッタイト軍は首都を進発し、Lawasa 山麓を経て、Apasa=Ephesos に向ったが、この間ヒッタイト軍を要撃した A. 王子の軍を Astarpa

河畔の Walma に撃破し、しかるのち (広義の) A. 領域内に入り、首都 Apasa に入ったことが知られるが、今一つの年代記 (KBo IV 4) の同じ年についての記事によれば、M. II 王は、Hattus を進発、Sehiriya 河を渡った Sallapa において、Euphrates 河畔の要衝 Kargamis=Carchemish よりこの戦に走せ参じた弟王の軍勢と合体し、Astarpa 川方向へ向ったこと、Aura に到ったとき、Arzawa の領邦であるがヒッタイト側に立つ Mira 国の Mashuiluwas 王の参会を受け、先に Murs. 王の軍が Lawasa 山で見た雷電が Apasa の都に落ちて、Uhh. 王が病んでいるとの情報を得たことが記されている。

そこで以上を整理して、Hattus→Sehiriya 川→Lawasa 山→Sallapa・Aura→Astarpa 川の Walma→Apasa という順路が得られる。

GGG ではこの順路をいかに比定しているかをまず尋ねて見ると、上記の夫々の地名を以下のように比定して、Boğazköy→(cl.) Sangarios 川 (tk.) Sakarya 川→同川上流屈曲内の某山→(cl.) Pessinus=(tk.) Sivri Hisar→Amorion→(cl.) Caÿstros=(tk.) Akar Çay 川の Holmoi→Ephesos の行程を以て、Murs. 王の進軍路と見ている²³⁾。Cornelius は、少なくとも上掲の二つの論文では、特にこの進軍路そのものを取上げることはしていないから、Astarpa 川=Maiandros 川のごとき C. 氏自身の比定をその折々に顧みることにして、以下には、G, G. 両氏ならびに C. 氏の二通りの見方に対して、筆者の感ずる所に従って批判的検討を試らしてみたい。

Murs. 王の A. 国征討の出発点 Hattus=Boğazköy については問題がないとして、1) まず Sehiriya=Sangarios, Sakarya の比定を検討してみる。G., G. 両氏の場合 Sehiriya=Sangarios の比定は、むしろ他の地名・地点を夫々に比定して来た結果出て来た結論という感が強く²⁴⁾、従って二つの川の名の類似は、特に指摘されてもおらず、この比定に異を唱えるには、他の地名の比定を一々駁して行くことの方が先決問題であるが、今はここに二つの名称の類似に関して私見をさしはさんでおく。Sehiriya と (cl.) Sangarios, (tk.) Sakarya との称呼の類似は、いかにもほとんど申し分なきに近いことができるであろう。しかしながらここに見逃すことができないのは、大 Arzawa 国を構成した一領邦としての Seha 川国 (KUR IDšeḫa) の名である。すなわち、Seha 川国の国名がある以上、その国の名を現わすに足るほどの可成り顕著な川たる Seha 川が小アジアの西部にあったことは疑問の余地がない。そして次には、Seha 川と

Sehiriya 川との二つの川の名がある以上、後者の名称が語源において前者の名称につながりを持ち、一方が他方の派生語形である可能性が存することについてもおそらくは異論があるまい。一步を進めれば、Seha と Sehiriya との名は、もともと普通名詞 *appellativum* に出で、seha または語根の seh- が、‘川’乃至‘水流’の意味を有していた可能性もなくはない。かような見地に立つならば、筆者自身古典期の Sangarios 川が、ヒッタイト時代に Sehiriya の名を以て呼ばれたこと自体には異議を唱えないとしても、Murs. 王年代記の Sehiriya 川必ずしも Sangarios=Sehiriya 川を指したものでなければならぬ理由はなく、Sangarios=Sehiriya 川のさらに西方に、同じ名の別の川がもう一つあった可能性もないとは云えまいと考えられる。Sehiriya, Sangarios, Sakarya の三つの名の類似は十分に承認しながら、Sangarios=Sehiriya のほかに、なお今一つの Sehiriya 川をあえて想定しようとするのは、それ以下の地名の比定について、G., G. 両氏の見解にどうしても同調しかねるものがあるからである。

2) そこで次には Lawasa 山について筆者の問題点と考える所を一言しておく。Lawasa 山に到ったとき、Murs. 王の陣営で、^{GIŠ}kalmišanaš の落ちるのが見られたといい、これは A. 国の都でも見られたのみならず、正に首都 Apasas=Ephesos に落ちて、Uhh. 王の病の因となったという。^{GIŠ}kalmišanaš とはそもそも何であるか？ Friedrich の辞典には、‘割木 Holzscheid’, ‘雷電 Donnerkeil’ の訳語が挙げられているが、また‘流星、隕石’を意味すると考えられたことがあり、GGG には p. 85 では‘隕石 meteorite’とせられ、p. 86 では‘雷電 thunder-bolt’とせられている。しかしながら一方に‘割木’の意味があるのであれば、この語の始めに添えられた決定詞 *determinativum* ^{GIŠ} が‘木、木材’を意味し、丁度漢字の木扁のように、一般に木の名・木製品の名など木に関係したものに添えられることをも考え合わせるならば、この語は落雷するときは大樹に落ちて、これを引裂いてしまう‘雷電’と解する方が素直で妥当なように思われる。しかりとするならば、GGG の比定による Lawasa 山と Apasa=Ephesos とは直線距離にしておよそ 400 軒弱を隔て、これはほぼ東京・京都間の程度の隔たりである。この両地で同じ雷電が望まれようとは考えられず、それでは、同じ日の同じ時刻頃に両地夫々に雷鳴現象があったものとするほかないが、果してそのようなことの起る確率はどの程度のものであろうか。

逃げ道は、天文学的現象と気象学的現象との区別が今日のように厳密を欠いたこの時代においては、流星と落雷とが同列同種の気界現象と解せられて、両者おしなべて ^{GIŠ}kalmišanaš の名で呼ばれたが、この記録に止められた現象は隕石の落下を伴った流

星であったとすることであろうが²⁵⁾、果して流星の現象は最大限において地表面のどの程度の広袤から望見せられうるものであろうか？ 筆者の何としてもうなずき難いのは、G., G. 両氏の地図上に指し示す Lawasa 山の位置が、Apasas=Ephesos を隔たること余りにも遠いように感ぜられることである。

3) Kargamis よりの援軍と王の本軍との会合点 Sallapa についても同じ趣旨の疑問が成り立つが、ともあれ Sallapa は Arzawa 方面を抑えるための前進基地として軍事上の要衝であったと見え、この方面への軍事行動の度にその名が文献に登場する。i) その始めは、上の Murs. 王大年代記第三年目の記事であるが、ii) 次いでこれより数年の後、Mira 国の Mashuiluwas 王が東隣 Pitassa 国を煽動して乱を計ったとき、これが鎮王のため Sallapa に赴いたことが、Mash. 王の子 Kupantainnaras との条約の始めの部分に記されており²⁶⁾、iii) 第三に、不明の Hattus の某王より Ahhiyawa 王に宛てた、いわゆる Tawagalawa 書信において、Lukka=Lycia 方面の騒乱を制するため王の行動も Sallapa 着後のことが詳しく記されている²⁷⁾。iv) 最後に、Madduwattas 文書 (KUB XIV 1) にも、Lukka 方面の動揺に対処して、Salpa (Sallapa の異綴 variants)、Pitassa より兵を動かしたことが述べられている²⁸⁾。

かくして、Pitassa 国や Mira 国をどの方面におくかの問題とも関連する訳であるが、少なくとも Lukka 方面への軍事行動の前進基地という点を問題にするかぎりには、GGG の指し示す Sallapa の位置——(cl.) Pessinus, (tk.) Sivri Hisar²⁹⁾ は、一般的に云って余りに遠きに過ぎ、また特には余りに北に寄り過ぎているように感ぜられる。さらに追々に私見を開陳する考えであるが、Mira 国の境界たる Astarpa 川についても、筆者は一層西南寄りの河川を考えているので、Sallapa=Pessinus の比定には賛成し難いのである。両氏自身 Milawata=Miletos 征討の行程において、Sallapa=Pessinus と Waliwanda=Alabanda との間の相当な距離を埋めるのに唯一つの城市の名も挙げられていないことを異としている^{29a)}。

それでは Sallapa はどこに求めるのがよいか？ 今もし強いて筆者自身の解答はいかにと問われるのであれば、今は仮に (cl.) Acroinos=(tk.) Afyon Karahisar の辺りを挙げて見ようかと思う。Gurney, *The Hittites* の巻頭の地図 (p. xvi) に従えば、Carchemish 方面からの道路が Hattus より西方をめざす路線と会同する地点として、Gurney らが Sallapa に擬する Pessinus のほか、Egridir Gölü の西北ほぼ今の Afyon Karahisar に当るかと思われる地点が示されている。この地図では、この地からは南方の Pamphylia, Lycia 方面へ向う路線しかなく、西方 Lydia への連絡はない

かのように図示されているが、西を指す路線が絶対になかったことは保証し難いであろうし、そもそもこの地図をそのままに認めるならば、Gurney らの Astarpa 川すなわち Caÿstros=Akar Çay 河畔の戦の後 Murs. 王の軍勢は Apasa=Ephesos へ向うことができなかつた筈であるという背理を来たす。

4) Aura=Amorion の比定³⁰⁾ については、二つの語形の類似というよりはむしろ相違に基づいて、この比定をどうしても承認することができない。筆者の考えは、ヒッタイト期・古典期を通じて、小アジアの地名に、-ura を含む地名がはなはだ多いという事実に立脚するものである。今それらをここに数え上げて見るならば、ヒッタイト期の地名では、問題の Aura のほか、Ura, Pitura, Huhhura, Gazzuira, 古典期の地名からは、Gaziura³¹⁾, Isaura, Garsaura, Mastaura, Anabura, Balbura, Cibyra, Carura, Myra, Limyra³²⁾ の名を直ちに示すことができる。これらのうちの多くの場合において -ura が一つの地名要素であったことはおそらく疑いがないであろうし、果して Friedrich の辞典には、Hatti 語すなわち Protohittite の部に、ura — ‘泉 Quelle, Brunnen’ が見出だされ、地名要素としての要求にまことによく適合する³³⁾。しかし何よりも筆者が注意を喚起したいのは、以上の相当数の例を通じて、ヒッタイト期の -ura, -a-ura の語形がほとんどそのままの形で、古典期の -yra= -υρα, -ūra= -ουρα < * -o-υρα, -aura= -αυρα < * -α-υρα へと引き継がれている事実である。然りとすれば、これらの地名の内、ひとりヒッタイト期の Aura のみが古典期に至って Amor-ion の語形を取らねばならない理由は全たく見出だされない。このような根拠から、筆者は Aura=Amorion の比定には全たく反対せざるを得ないのである。

5) 最後に、Astarpa 川の Walma=Caÿstros, Akar Çay の Holmoi < *Fóλμοι という比定³⁴⁾ について。Strabo, § 663 (または 14. 2. 29) の Holmoi に Walma を引き当てようとする点では、G., G. 両氏の見方と C. 氏の見方とは軌を一にしているというよりは、最初に Walma=Holmoi の比定を唱導したのは、Garstang であって、これが GGG にも引き継がれ、また一方では Cornelius もこの比定に賛成したものである³⁵⁾。しかしながら同じ Strabo, § 663 の Holmoi を地図に指す段になると、C. 氏の指す地点と、G., G. 両氏の指す地点とが、余りにも隔たっていることに我々はまず驚ろかざるを得ない。Strabo によれば、Maiandros 河畔の Carura から Laodiceia, Apameia, Metropolis, Chelidonia を経て Holmoi まで 920 stadia=170 軒, Holmoi から Philomelion を経て Tyriaion=(tk.) Ilgın まで 500 stadia 強=95 軒弱、加うるに Phrygia Paroreia=Sultan Dağ 山脈の北端に近いといえ、Holmoi の位置はほ

ぼ確定しようかと思われるのに、G., G. 両氏はこれを Akşehir 湖に注ぐ Caÿstros=Akar Çay の畔にありと見て、Astarpa川=Caÿstros川という結論を出し、C. 氏は Maiandros 川上流に臨むものと見て Astarpa=Maiandros なる結論に導びく。素直に Strabo を読むかぎり (cl.) Holmoi は Caÿstros 川の辺りに求められるべく、Walma=Strabo, § 663 の Holmoi とするかぎり Astarpa=Caÿstros とせざるを得ないように思われる。

しかしながら、古典期の地名 Holmoi の語形そのものはヒッタイト期の地名 Walma の語形を継承するものと認めるにしても、Holmoi についても、Walma についても顧りみておかねばならない二三の事実がある。まず古典期の Holmoi であるが、Strabo の記述した小アジアには、今一つの Holmoi があり、西 Cilicia の海岸に見出だされる。そこで Holmoi=Walma と見るかぎり、Cilicia の Holmoi もヒッタイト時代には Walma と呼ばれていたと考えることが可能であり、前二千年紀の小アジアには少なくとも二つの Walma があったとの推測が成り立ち、かつ両者とも河岸または海岸にあったことから Walma の地名がもとは‘渡し’、‘津’、または‘船着場’のような意味をもった普通名詞 *appellativum* に出ているという解釈も不可能ではあるまい。

次にヒッタイトの文献に見える Walma についても、以下のようなことをも一度考えて見ねばなるまい。Walma なる地名は、上に訳した Murs. 王の Arzawa 遠征の記録のほかに、Hattusilis III または Tuthaliyas IV (ca. 1250~1220) が Dattasas 国の Ulmitesup 王と交わした条約 (KBo IV 10) の中の Dattasas 国の境界を叙した条りにその隣国の一つとして、Walma 国の名が見られる。G., G. 両氏は、無造作にこれら二つの Walma を同一視し、条約の方の Walma 国の首都がすなわち Astarpa 河畔の決戦場 Walma であると決めてかかっている³⁶⁾が、条約に記された地理を虚心坦懐に読めば、Walma 国は、Halys 川屈曲の西南方外側に当る湖沼に富む低地帯——ほぼ古典期の Lycaonia を中心とする地方——をさしたと一般に認められている、いわゆる‘下の国 Kattera Udne’の西南方に当ると認められるので、Walma 国の Walma と Astarpa 川の Walma とは、語源においてはもともとと同じ語であったとしても、その指している土地そのものは同じではなかったことが考えられる。殊にも Walma が、例えば‘船着場’のような普通名詞から来ているのであれば、Walma の地名は当時の小アジアに二三に止まらず存在したとの想像も許されなくはあるまい。因みに C. 氏も、Ulmitesup の条約の Walma と、Arzawa 征討記の Walma とを別の土地を指したものと考え、条約の Walma を Cilicia 海岸の Holmoi に当るとしている³⁷⁾。予定の紙

ヒッタイト歴史地理考 (I)

数もほぼ尽きたので、Ulmitesup の条約に記された‘下の国’の地理の検討は、別の機会に譲って、ここに詳説することを控えるが、筆者の結論としては、i) Cilicia の Holmoi に当る Walma と、ii) Walma 国の Walma と、iii) Phrygia Paroreia の Holmoi に当る Walma と、iv) さらに今一つ Astarpa 川の Walma と、四者夫々に別の Walma があったと考え、かようにいくつもの Walma があったればこそ、Murs. 王の記録には、‘I. NA IDaštarpa I. NA URUwalma’——直訳して‘Astarpa 河において Walma において’——のように特に A. 河の Walma であることが明記されているのではないかと考える。A. 河についても、追って Mira 国の Kupantainaras との条約に見える Mira 国の地理を論ずる際に、改ためて説くことにするが、今結論だけを云うておくならば、筆者としては、Astarpa 川を、Maiandros の支流なる Lycos 川または Capros 川に比定したいと思う。

以上を要約して、筆者としては今は仮に、Murs. 王の進軍路として、Boğazköy→Akar Çay→同川南の某山→Afyon Karahisar→同西南方山中の某泉源地→Lycos 又は Capros 川の渡り場→Ephesos なる道程を想定したいが、G., G. 両氏や C. 氏のヒッタイトの歴史地理に批判的検討を加えたとはいうものの、これら諸氏の研究によって前二千年紀小アジアの歴史地理につき大よその眼鼻が付けられたればこそ、筆者なりに一つの考えを打出すことができたのであって、大綱はあくまで上記の諸氏の成果に則ったものに他ならないことは、改ためて記すまでもなからう。

最後に一言申し添えさせて頂けなければ、この一文を草しつつ身にしみて感じたのは、我が国におけるヒッタイト学の文献の余りにも余りな欠除と貧困とである。慎重を期される学者ならば、おそらく筆を折ってしまわれることであろう。しかもなお、それでも、与えられたかぎりの乏しい材料を用いて、とにかく日本のヒッタイト学を始めねばならないという使命または責任のごとき感じが、そしてまた上記の諸研究を読了して自ずと湧いた率直な疑問が、筆者をして敢えてこの一文のために筆を執らしめた。西南アジア史のための講座が一人立して、その一環としてヒッタイト学の研究室も充実し、およそ一通りの文献の整備せられる日の近からんことを願ってやまない。学問のあらゆる分野において国際的に一流の研究を次々に発表しつつある日本人は、条件さえ整うならば、必らずやヒッタイト学の領域においても独自の成果を挙げ、世界の場に出て堂々と寄与する所があるであろう。

註

- 1) ヒッタイト語のローマ字綴の *h* と *s* とは、印刷上の都合を考え、H. Kronasser の比較文法 (1956) や下記の Garstang & Gurney の著書の例にならって、単に *h*, *s* と記すことにする。ただし原文引用の場合のみ慣行に従った。また Hattus は Hattusas とする方がよい理由もあるが簡単な Hattus の方を用いて統一した。
- 2) RHA 65, p. 114.
- 3) 諸王の治世年代などは、Gurney の算定に従っておく、v. O. R. Gurney, *The Hittites* (1954) p. 216.
- 4) Arzawa 国は、Murs. Ⅱ に征服せられた (ca. 1336) のち、Scha 川国、Mira 国、Happalla 国、(および狭義の Arzawa 国?) に分割せられた。そこで、これら諸国を含めての広義の A. 国と、その中心部を指しての狭義の A. 本国とを、二つの概念として区別しておく必要がある。
- 5) Zehnjahrannalen=Annales décennales=Personal Annals=KBo. Ⅲ 4. と Ausführliche Annalen=Ann. complètes=Official Ann.=KBo. Ⅳ 4. Cf. A. Götze, *Die Annalen des Muršiliš* (MVAeG 38) 1933.
- 6) Cf. J. Friedrich, *Staatsverträge des Hatti-Reiches in heth. Sprache 1-2* (MVAeG 31, 1 und 34, 1) 1926.
- 7) Selbstbiographie Hattušiliš' Ⅲ = Autobiographie de Hattousil Ⅲ = Hattusilis, *Narrative of Accession*=KBo Ⅲ 6 et KUB I 1-10. Cf. Götze, *Hattušiliš* (MVAeG 29, 3) 1925; ders., *Neue Bruchstücke z. großen Text des Hattušiliš* (MVAeG 34, 2) 1930.
- 7a) 以上のほか、Madduwattas 文書 (=KUB Ⅳ 1) と Götze, *Madduwattaš* (MVAeG 32, 1) 1928; Tawagalawa 書信 (=KUB Ⅳ 3) と F. Sommer, *Die Ahhijavā-Urkunden*, 1932 などが挙げられる。
- 8) GGG の方法にならい、必要なときは、古典期の地名の前に (cl.) を、現代トルコ語地名の前に (tk.) を付けて、その別を明示する。
- 9) Goetze, *Kleinasien* (1957) p. 179; GGG, p. 84.
- 10) Götze, *Ann. Murš.* p. 55; なお後段に原文を引用する。
- 11) Cornelius, RHA 62, p. 10; 65, p. 113.
- 12) E. Forrer, *Vorhomerische Griechen in den Keilschrifttexten v. Boghazköi* (MDOG 63, 1924) pp. 1-22; ders., *Die Griechen in den Boghazköi-Texten* (OLZ 1924) pp. 113-118; F. Sommer, *op. cit.*
- 13) Goetze, *Kleinasien*, p. 183.

ヒッタイト歴史地理考 (I)

- 14) Gurney, *op. cit.*, pp. 46-58.
- 15) Götze, *Kleinasien z. Hethiterzeit* (1924) p. 26, n. 6; P. Kretschmer, *Glotta* XIII (1924) p. 207; XXI (1932) pp. 213-257; Forrer, *op. cit.*; Sommer, *op. cit.*
- 16) Cornelius, *RHA* 62, p. 11.
- 17) *Ibid.*
- 18) これはまたヒッタイト文書の *Milawa(n)ta* を *Milyas* に比定することとも深く関連している, v. *ibid.*
- 19) *GGG*, p. 81.
- 20) Goetze, *Kleinasien*, pp. 181-183; Gurney, *loc. cit.*
- 21) *GGG*, p. 82.
- 22) この語の前に *Glossenkeil* と称せられるくさび文字の斜線一画一字がある。
- 23) *GGG*, pp. 76-77, 85-86.
- 24) *GGG*, p. 76.
- 25) Cf. *GGG*, p. 88.
- 26) *KBo* IV 3, 7; V 13, etc.; *GGG*, p. 89.
- 27) Sommer, *op. cit.*
- 28) *KUB* XIV 1 Rev. 38.
- 29) *GGG*, p. 77.
- 29a) *GGG*, p. 79.
- 30) *GGG*, p. 86.
- 31) (cl.) *Gaziura* がヒッタイトの *Gazziura* に当ることは、多くの人の賛同する所である。
- 32) *Myra, Limyra* については、cf. H. Kronasser, *Παρνασσός—Λαρνασσός* (*Indo-germanica*, Krause-Festschrift, 1960) p. 52.
- 33) このほか、*Luwi* 語に *ura-* ‘大きい’ の形容詞があるが、形容詞が地名としての合成語の後部を占めることは、考え難かろう。
- 34) *GGG*, p. 86; Cornelius, *RHA* 62, p. 9.
- 35) Cornelius, *op. cit.*, p. 16, n. 58.
- 36) *GGG*, pp. 74, 86.
- 37) Cornelius, *op. cit.*, p. 9.